

特別講演会 **羽賀 祥二** 名古屋大学名誉教授

草創期の愛知医学校・病院と地域社会

——伝染病・災害への対応をめぐって——



■講師

名古屋大学名誉教授

羽賀 祥二 先生

■プロフィール

岐阜県生まれ

博士（歴史学）、専門（明治維新史）

名古屋大学文学研究科博士後期課程1979年中退 京都大学人文科学研究所助手、立命館大学文学部助教授などを経て名古屋大学大学院人文学研究科教授

著書：『明治維新と宗教』筑摩書房（1994）、『史蹟論 -- 19世紀日本の地域社会と歴史意識 --』名古屋大学出版会（1998）、『近代日本の地域と文化』吉川弘文館（2018）、『名古屋と明治維新』風媒社（2018）ほか



2019年4月16日 **火**
14:00-15:30

名古屋大学医学部
基礎研究棟
1階 会議室 1

入場無料
予約不要

問合せ先：名古屋大学附属図書館医学部分館
名古屋市昭和区鶴舞町65
TEL 052-744-2505

特別講演会

草創期の愛知医学校・病院と地域社会 ——伝染病・災害への対応をめぐる——

日時：2019年4月16日(火)14:00-15:30

会場：名古屋大学医学部基礎研究棟 1階 会議室1

幕末維新时期に西洋医学が日本に導入されていくなか、名古屋でも1871年(明治4)の廃藩置県前後、医学校の創立、病院の開設への動きが見られた。創立から1890年代に至るまで、医学校・病院の組織や財政、教育体制には紆余曲折があったが、他方で、後藤新平などにより斬新な医学教育や衛生行政に関する提案もそこにはあった。

西洋医学への期待が高まったのは、日本が国際社会へ編入されていくなかで、コレラなど新たな伝染病に対処していく必要があったからだ。こうした伝染病の流行や防疫に対して、医学校や病院はどのように対応したのだろうか。愛知県内で伝染病が発生したときの医学校・病院の具体的な動きを紹介しながら、このことを考えてみたい。また、地域社会と医学校・病院との関わりで言えば、1891年10月の濃尾大地震の罹災者の救済がどのように行われたのか考えることは、興味深い問題の一つである。さらに、そうした対応を支えた医学生や医者などの実態を知ることも重要である。

伝染病と災害に対処しつつあった当時の医学校・病院の有り様を、それを担い、発展させようとした人々の努力をたどりながら考えてみたい



ミニ展示会

明治～昭和初期の

名大医学部生

開催期間：2018年12月4日(火)～2019年4月30日(火)

平日 9:00-20:00 2月20日-3月9日は9:00-17:00
土 13:00-17:00 2月20日-3月9日の土曜日は休館日
休館日 日・祝日

名古屋大学附属図書館 医学部分館 2階入口ホール

問合せ先：名古屋大学附属図書館医学部分館

名古屋市昭和区鶴舞町65

TEL 052-744-2505

